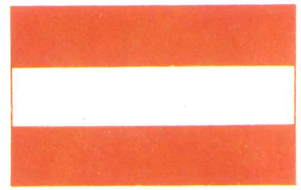


飛 騰

第4号



海援隊旗

1992年を振り返って

館長 小 椋 克 己

坂本龍馬記念館も昨年11月で満一年、その間新聞、雑誌、建築関係誌なども良く取り上げて下さり、お陰様で、全国から目標を上回る17万人近い方をお迎えしました。

この記念館は、いわば「龍馬への入り口」なのですが、それにしても当初は、地下2階の資料不足に悩まされました。しかし、5月に「ピストル」「血染めの掛け軸」「薩長同盟裏書き」など、11月には「新政府綱領八策」「修業心得」「龍馬の手紙（日本の洗濯ほか）」など12点の複製品が入り、作家宮地佐一郎さん寄贈の書軸とともに、体裁を整えつつあります。

その他、当館学芸専門員の取材、編集による自作の説明資料（長州藩、脱藩の道など）は、余所には無い、温かみのあるものと自負しており、それをコンパクトにまとめた「お持ち帰り資料」も好評です。

イベントは開館早々で心配でしたが、7～8月のNHKテレビアニメ「おーい竜馬」原画展はNHKエンタープライズのご協力で豊富な資料が到着、夏休みの子供連れで賑わいました。

11月の開館1周年を挟んだ、龍馬まつり協賛「龍馬展」は高知市出身、神戸市在住の元神戸市立美術館長荒尾親成さんの維新コレクションから「龍馬の絶筆の手紙」など10数点をお借りし、またこれに合わせ、長崎で龍馬や妻のお龍

の世話をした小曾根家の第17代当主、吉郎さんが、お龍も触れたであろう170年前の月琴（弦楽器）を持参、「龍馬展」に花を添えて頂き、これも大盛況でした。

また、大洲市の郷田さんからは、相応しい場所にと、「いろは丸」購入に関わったという「對馬屋」の銘板が寄託されました。

11月、愛知県下で地域起こしを考える人たち500人が、2万トクラスの豪華客船で高知を訪れ、船内研修の他、当館南側の八策の広場をフルに使い、車座になってシンポジウムを行ったのは壮観でした。「大成功」という参加者や主催の愛知県からのお便りを沢山頂き、龍馬館の機能についての良い示唆となりました。

そして、高橋晶子さんご夫妻が龍馬記念館の設計でJIAの新人賞を受け、今年のニューパワーとして注目されています。

本当に「お陰様で」の1年でした。心からお礼申し上げ、じっと見守ってくれている「龍馬さん」を感じながら、今年も頑張ります。



▲小椋館長 龍馬の書簡を説明する

特別展回顧

今年、NHKアニメ「おーい竜馬」原画展と第19回龍馬まつり・龍馬展の2つの特別展を開催し、連日大勢のお客様をお迎えし、好評をいただいたので、それを振り返ってみたい。

NHKアニメ

(1)「おーい竜馬」原画展



原画展では、坂本家の人々の紹介や、名場面のセル原画が展示されました。

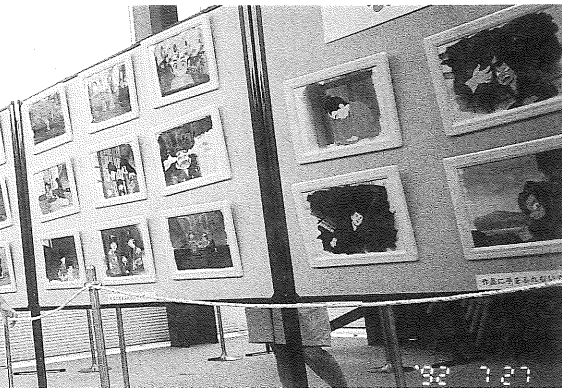
坂本家の人々



また、原画のもとになったキャラクターの決定稿も展示され、アニメになっていく過程を知ることができました。これらの資料は、NHKエンタープライズのご厚意によって提供されたもので、約40日間多くのお客様に見て頂くと同時に、アニメ制作への興味とご理解を得ることができたものと思われま



夏休みに入ると、よい子の皆さんは家族と一緒にアニメの原画展を見たり「龍馬おもしろクイズ」に熱中したり、と大にぎわいでした。



セル原画には美しい彩色がなされていて、生き生きと活躍する龍馬の少年時代を彩る数多くの名場面が描かれており、改めてその感動を思い起こさせるものばかりでした。



(学芸専門員 岡林春雄)

(2) 第19回龍馬まつり・龍馬展

— 坂本龍馬記念館開館1周年記念 —

○主催 龍馬まつり実行委員会

県立坂本龍馬記念館

○期間 平成4年11月8日(日)～11月23日(月)

○会場 県立坂本龍馬記念館

○出品点数 48点

○展示目録 3万部、受付でパンフと共に渡す。

今年、京都の霊山歴史館、下関の長府博物館、そして当館の三館が、11月15日を中心として龍馬展(展覧会の名称は異なる)が開催された。

他の二館はいずれも歴史があり、収蔵品も多く、知名度が高いため、全国の龍馬ファンはそちらへ行き、当館への入館者は少ないのではないかと心配された。

ところがふたを開けてみると、期間中の入館者は10,628人、1日平均約664人という盛況で、塩川自治相(当時)、鈴木道路公団総裁、作家宮地佐一郎氏をはじめ多くの知名人も入館された。(写真①)

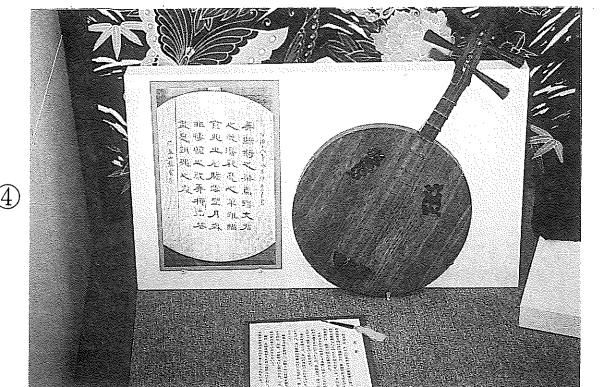
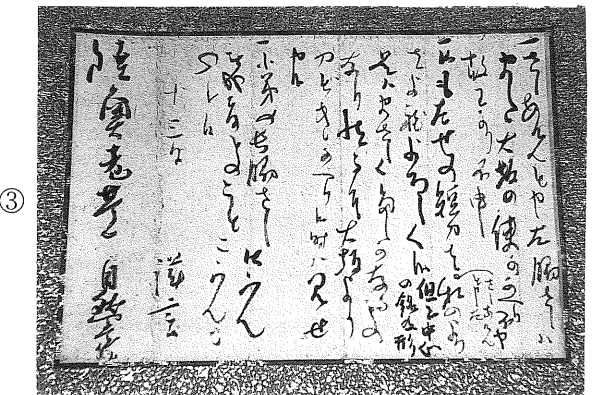
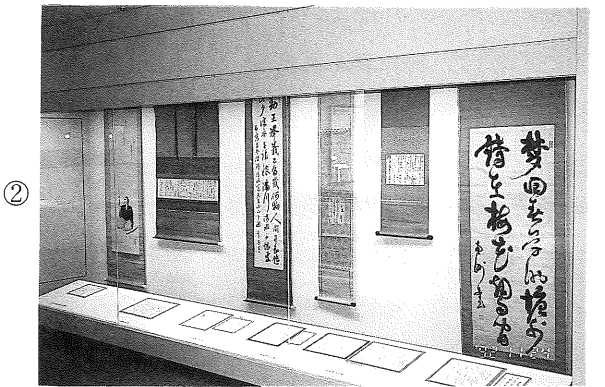
展示品の目玉は何といっても荒尾親成氏所蔵の11点で(写真②)で、その中には龍馬の絶筆といわれる慶応3年11月13日付陸奥宗光宛書簡(写真③)も含まれていた。

11月12日には長崎市の小曾根吉郎氏が、乾堂が愛した月琴を持参され、翌13日から展示した。これは錦上花を添えたものである。(写真④)

また初公開した龍馬の書簡4点、父八平が龍馬に授けた「修行中心得大意」、「新政府綱領八策」(以上複製)は、公観の描いた抜刀姿の龍馬肖像画とともに多くの人々の目をひいた。

当館にとって初めての特別展であったが、幸いご好評をいただき、今後の励みになった。

(学芸専門員 下元 正清)



当館に長期寄託された

つしまや 對馬屋の古い板

さる12月6日(日)、愛媛県の郷田智成、小池正義の両氏が、對馬屋と刻まれた古い板を長期寄託のため持参された。

この古い板の持つ歴史的意味や、寄託にふさわしい場所として当館を選んで下さったこと、またそれを遠路持参されたことなどを思うと、ただただ感謝の外はない。

この板は、板の裏の両側に浅い溝と水洩れを防ぐニカワの跡があり、形や大きさから考えて、当時、對馬屋の店先や倉の前に置いていた防火用水槽の前板だろうと思われる。

この板は、郷田、小池両氏が大洲市内の旧家の土蔵の中で、土ぼこりの中に埋っている所を発見したものである。土ぼこりを払い、汚れを拭きとった時に現われた對馬屋の文字を見て、両氏はさぞ興奮なさったと思われる。

さて、對馬屋って一体なんだろう。それが坂本龍馬とどうつながっているのだろうか。

慶応3(1867)年4月23日の夜、讃岐(香川県)の六島の沖で、坂本龍馬の率いる海援隊がチャーターした大洲藩船「いろは丸」と紀州藩船「明光丸」が衝突し、「いろは丸」は沈没した。



データー		
形状	台形	
大きさ	たて	4 5 cm
	横 上辺	7 8
	〃 下辺	7 5
	厚さ	2.3
素材	ケヤキ材	

これは、蒸気船同士による我が国最初の海難事故であった。

龍馬と「明光丸」船将高柳楠之助は港町柄において、「いろは丸」沈没にかかる責任の所在や賠償等について交渉するが、両者の申立ては平行線のままである。高柳は徳川御三家の紀州藩の威光をバックに、土佐の浪人何するものぞと威高に迫るとともに、責任回避に懸命となった。しかし龍馬は毅然とした態度で、万国公法を持ち出し、有利に導くよう努力した。

そして談判の舞台は長崎に移る。土佐側には参政後藤象二郎が、また紀州側には藩の勘定奉行茂田次郎が交渉に加わる。

象二郎や龍馬の毅然とした態度、巧みな戦術や弁舌により、形勢の不利をさとった紀州側は、薩摩藩士五代才助に周旋を依頼して、賠償金8万3千両を土佐側に支払うことで結着した。

これが「いろは丸事件」の概略である。

----- (P 7 の下段に続く)

〔講演記録〕

坂本龍馬と二十世紀(3)

プリンストン大学教授 マリウス・B・ジャンセン
訳・町田宗鳳 於'91・11・14 高知

日露戦争に至って、龍馬の記憶がようやく呼び戻されました。しかし、それは必ずしも歴史的事実に基づいたものではありませんでした。日本海海戦前夜に明治皇后が龍馬の夢を見られたという話は、周知のところですが、皇后は、ロシアのバルチック艦隊のことを案じておられたので、龍馬が夢の中に現れて、何も心配することはないと告げて行った、と言われていました。つまり、「臣は、国事のために身を致したる土佐の坂本龍馬と申す者にて候。わが魂は御国の海軍に宿りて忠勇義烈なるわが軍人を保護仕らん覚悟にて候」と言っただけです。ところで面白いことに、皇后は龍馬の何者たるかを全くご存じなかったというのです。そこで皇后は、土佐出身の宮仕えの人々にお尋ねになったところ、その中の一人、田中光顕が「仰せのように坂本龍馬と申す者がおりました」と答えたそうです。そして次の夜も龍馬が夢に現れて、同様のことを申しました。そこで人々が龍馬の写真をお見せしたところ、「確かにこの人だ」とおっしゃったと言うわけです。

この話に関して、興味深いことが多々ございます。司馬遼太郎氏も書いていますように、このようなことは、本来、宮中から外へ漏れることは滅多にありません。しかし、この時はそうではなく、しかもアッという間に有名になってしまいました。恐らく宮中の土佐出身の人々が地元の人間の誇りとして漏らしたと考えるのが妥当でありましょう。ともかく、このことがあって以来、大日本帝国陸海軍によって、龍馬の

名が榮譽あるものとして、認められるようになったわけです。

爾来、高知の地元では、龍馬のイメージを大変誇りあるものとして受け止めるようになりました。桂浜の銅像や京都の円山公園に中岡慎太郎と共に立つ彼の銅像設立のためのキャンペーンは、今からそう遠くない時のことでしたが、それでも全国的規模のものではなかったと言えます。私が1955年に龍馬の研究を始めた時、東京の人々は、私のことを変わった事をやるヤツだという目で見ていました。しかし今日では、そういうことはまずないでしょう。龍馬のイメージを変えたのは、一体何なのでしょう。

第1には、亡くなられた平尾道雄先生を始めとした地方歴史家の素晴らしい研究でしょう。

第2は、大日本帝国皇国史観が消滅し、日本が民主的な平和国家へと移行するにつれ、人々は龍馬を旧社会における不屈の人として、新たな目で評価し始めました。教科書も軍国主義の指導者ではなく、新たな日本の指導者あるいは先駆者を取り上げる傾向をもつようになりました。闘争よりも協調性が、大名よりもデモクラシーが、もっと大切なものとなったわけです。

情報社会のテクノロジーによって、この傾向は加速度を増しました。映画やテレビ、司馬遼太郎氏その他の文筆家による巧みな描写などが、龍馬の名前を茶の間に浸透させました。何よりも龍馬のイメージは明るくて楽観的、しかも果敢に旧体制に挑戦し、素早く新しいアイデアを受け入れる人物として受けとめられています。最近では、外国でも、龍馬の名前が聞かれるようになってきました。北京のオペラでも、龍馬が上演されるなど、一体誰が想像したでしょう。

(以下、次号に続く)

〔寄稿〕

記念館を見て

龍馬の心情を思う

村上 寿 雄

白い波が、永遠に時を刻む桂浜に、この地が生んだ坂本龍馬の記念館が建った。これは高知県民が中心となり、全国にも呼びかけて完成したのであるが、その設計・構造・採光などについては、若き婦人建築家高橋晶子氏によるもので、地下二階・地上二階・鉄筋コンクリート壁構造・鉄骨吊り構造となっており、全く斬新的なものである。

わが国の史上にも偉大な功績を残し、その暖かな人柄をとおして、多くの人びとに深い感銘を残した龍馬の資料を保管すると共に、歴史的・人間的な研究の場となるであろう。

ある機関が、若い人へのアンケートで、「近代の人物で誰を尊敬するか？」という問いを出したところ、「坂本龍馬」との答が約75%あったという。

「坂本龍馬のすべて」の著者で、有名な史家平尾道雄氏は、その要約した言葉の中で、次のようにのべておられる。「龍馬は土佐を脱藩した一介の浪人である。すなわち、一介の脱落浪人ならばこそ、龍馬は龍馬だけの自由があった。脱落浪人だから藩の保護もなく、生活の保証もなかった。それゆえ生命の道も求めなければならぬし、時には生命の危険に身をさらさねばならなかった。そんな立場で国事に奔走する。時には生死の線も超えねばならなかったのである。

苦難の道ではあったが、彼はあえてその道を選んだ。伏見寺田屋で九死に一生を得たのも、京都近江屋で刺客の襲撃を受けて不慮の死を遂

げたのも、それを実証したものとみななければならない。変幻出没、数奇な生活であった。そのドラマチックな生涯こそ、人びとの関心が高まるのではないだろうか」と。これは青年に通ずる龍馬への思いである。

短い人生の中で、彼ほど一瞬の時も惜しむかのように、全国を飛翔し、多くの人びとに会って、その人の持っている無形の宝を吸収し、時代を洞察し、世の動きに合致した使命感を感じて、世人の仕合わせのために、共に生きる体制づくりをし、渾身の力を振りしぼった人は少ないであろう。

彼は幼少の頃からひ弱な少年だったが、両親をはじめ兄・姉の愛情とともに、先輩や同志の友愛を受けて、素直で純真・誠実な若者に育ち、さらに武芸を修業して、真の勇氣・決断力も養われた。龍馬にとっては、自分以外の人はみな“師”の思いで学んだ。

王政復古の大業が成って、新しい体制の準備（今の組閣に当る）に当って、龍馬は自分の名を入れなかった。西郷がこのことについて質問したところ、龍馬は「自分は世界の海援隊でもつくるさ……」と言ったという。彼にとっては、高い地位について権勢を張るよりも、平等な地位に居て、人間としての深い交わりを望んでいた。また当時は、大判・小判を沢山積んで楽しむ財閥は沢山いても、新しい国家建設の財政体制としては、“鑓”一文もなかったが故に、彼にとってはこの充実こそ急務であった。

この矢先、数名の刺客が中岡慎太郎をも含めて彼等を襲い、遂に暗殺してしまった。彼等にとっては、これほど誠意を尽し、全力を注いですべての人びとの為にと尽してきた重大な時を目前にして、“あまりにも酷い仕打ち”と直感したことであろう……と、その瞬間の心情を察

知するにあまりある。

この黒幕については、いろいろと推測されながらも一世紀以上謎に包まれてきた。ところがこのたび、或る放送機関を通じて、畧々解明された。権勢欲に固まっていたかつての同志であったが、彼らは既に裁かれている。

龍馬の生涯は、世の人びとに仕えるという姿勢であった。その愛情とその精神的源流はどこから流れてくるか。このことは記念館のこれからの研究課題として、また数多くの歴史家の資料としても取り上げていただきたい。

（P. 4より続く）

この「いろは丸」の購入について、大洲藩士豊川渉の「いろは丸終始顛末」と、藩の公式文書「大洲藩史料」とでは、大きな違いがある。

◎ 大洲藩士豊川渉の「いろは丸終始顛末」

慶応2年6月、7月頃、藩士国島六左衛門は藩命により、洋銃購入のために長崎に赴いた。そこで坂本龍馬に会い、彼のすすめで独断で蒸気船をオランダ人ボードインから3万両で購入することになった。この事は藩の許可を得たものではないので、大洲藩の名義で購入することができない。そこで薩摩藩士五代才助の周旋により、薩摩藩の名義で購入することになった。（後に大洲藩名義となる。）また、「いろは丸」という船名は、龍馬の命名とされている。

◎ 藩の公式文書「大洲藩史料」

慶応2年12月16日付で大洲藩主加藤遠江守家来友松弘蔵が幕府に届け出た書状では、次のようになっている。

遠江守領分の町人村馬屋定兵衛と申す者、荷物運送の為、長崎に於いて、此度西洋型蒸気船を一艘オランダ人ボードインより買い請け候。

北海道浦臼町に、明治37（1904）年に、龍馬の養嗣子坂本直の妻（坂本留子）が依頼して、時の著名な画家林竹治郎画伯（朝の祈りの作者）によって描かれ、晩年の本人に最もよく肖ているという油絵がある。龍馬が懐に手を入れているのは、“聖書”であるとも言われているが、これは後日の研究の結果を期待したい。

（北海道・樺戸郡浦臼町教育委員会）
文化財保護委員

これによって遠江守家来共、当形勢柄の儀にも御座候間、右船へ乗り組み、運用乗働き等習練のため、九州四国中国は勿論、御当地奥州松前箱館辺へも連々乗り廻り 〈略〉

対馬屋は、対馬（長崎県）から大洲へ移住して来たと伝えられ、海運と商品流通を手がけ、同藩の特産物である木ろうや和紙、米等を京、大坂へ運んで販売し、財をなした。

現在の太田市本町二丁目の一角に店舗と屋敷があったが、明治初期に廃業し、姿を消した。

国島六左衛門は慶応2年12月25日未明、責任を感じて自刃している。

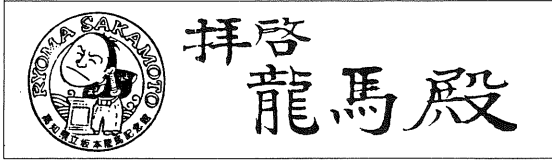
悲劇の「いろは丸」は、購入の段階から問題があったが、いずれにせよ対馬展が何らかの形で関わっていたものと思われる。

後考を俟ちたい。（学芸専門員 下元正清）

入 館 状 況

平成5・1・12・現在（開館以来426日）

○総入館者数	183,447人
○最多入館 平成4・1・3	2,552人
○最少入館 〃 5・1・11	49人
○1日平均入館者数	431人



拜啓 龍馬殿

- 高校生の時に「竜馬がゆく」を読んで以来、龍馬のファンです。明るくて心が広くて男気があって、でもどこかつかみどころのない、そんな龍馬が大好きです。33年という短い人生ではあったけれども、大きな大きな仕事をした龍馬を心から尊敬しています。

龍馬の様に常に前向きに、明るく生きて行きたいな。そして出来ることなら、龍馬の生きていた時代にタイムスリップして、龍馬に会いたいです。もしかしたら、お竜さんでなくて、Y子さんと一緒になっていたかも？

(10月17日 兵庫県 S・Y 女性)

- 高知には初めて来ましたが、龍馬記念館があると知り、まっさきにやってきました。市内から少々時間がかかり、途中、観光めあての資料館かと不安になりましたが、ここまで来て、その考えがまちがいであったと感じました。

この桂浜に立ち、太平洋を望む時、龍馬の生きた時代にふれることができた気がします。

現在の政治を龍馬は何と見るでしょうか。

土佐の心にふれることのできた喜びをみやげに九州へ帰り、百年後の日本を考え、行動したいと思います。

(11月4日 大分県 M・S 男性)

- 11月15日です。3度目の高知です。
1回目は高校の時、あなたの名前しか知らなかった。
2回目は大学の時。卒論に大政奉還を書くことになり、頭の中は幕末の事件とあなたの名前とそのまわりの人々だらけ。

そして3回目は2人の子どもと一緒にです。「おーい竜馬」を見て少しばかり龍馬という名前が身近になり、少しばかり興味を持ってくれるようになった。

小4と6歳の乙女と龍馬です。今度来るのはいつかしら。そして誰と一緒にかしら。今度は2人の子どもが自発的に来てくれることを期待している。

(11月15日 大阪府 M・H 女性)

- はるばる宮崎は都城より貴方様にお会いしたくて、夜中のフェリーに乗ってやってまいりました。主人は幼い頃からの大ファンで、息子は貴方様の名前を少しまねて、竜太と申します。その竜太、貴方様に似て背の高い、4歳にして近目、おねしょも今だになおりません。貴方様の両親になったかのように心配、そして喜んでおります。貴方様のように雄々しく、広い目の持てる人間に育って欲しいと願っています。

一度、直接お会いしてみたかったです。

(11月22日 宮崎県 M・K 女性)

- はじめまして。昨日よりKさんの妻となりましたH子です。私の旦那様は、とても龍馬様を尊敬しています。

家には山ほどの龍馬様に関する本があり、私の新婚生活は、その本を読むことから始まると思います。

(12月3日 奈良県 K・H 女性)

館だより “飛騰” 第4号

平成5年(1993)2月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

Tel (0888) 41-0001